

生殖医療専門施設における統合医療

田中久美子、森本義晴

HORAC グランフロント大阪クリニック

抄録本文：日本における生殖医療専門施設での統合医療の起源は、1987 年に森本義晴が河内総合病院不妊センターを設立した時点に遡る。1998 年には、日本で初めて統合医学を応用した不妊・不育治療専門機関「IVF 大阪クリニック」を設立、2009 年には統合医療部門を立ち上げ、生殖医療に特化した統合医療を、患者が活用しやすいシステムとして整備し、個々の体調・ライフスタイル・興味関心に応じた「こころと身体づくり」を支援する体制を構築している。

不妊治療は、身体的・経済的な負担に加え、精神的な負担も大きく、患者の生活の質(QOL)に深く影響を及ぼす治療である。特に、治療が長期化している場合や、原因不明の不妊に直面している患者様においては、うつ症状、不安感、パニックなどを訴えるケースが増加傾向にある。個々の背景や状況は多様であり、苦しみや困難を他者と共有することが難しく、孤独や孤立感を抱えながら治療を継続する患者も少なくない。

当院では、患者様のニーズに応じて生殖医療専門医が、初診時に胚質改善、着床改善、卵胞数増加、冷え性改善、多嚢胞性卵巣症候群対策、早発閉経対応、内膜肥厚、妊娠力向上、アンチエイジングの 9 つの統合医療プログラムを提案している。具体的には、統合医療コーディネーターが、ミトコンウォークや HIIDEYOGA、ストレッチなどの運動系、レーザー治療、受胎鍼、リフレクソロジー、ファータイルアロマセラピーなどの施術系、生殖心理カウンセリング、生殖栄養カウンセリングなどのカウンセリング系、水素療法やエムセラなどの補助療法を組み合わせ、個別にコーディネートする機会を患者様に提供している。

生殖医療専門施設内に統合医療ゾーンを併設することで、体質改善や妊娠力向上に加え、治療継続へのモチベーションの維持、治療への納得度・満足度の向上、精神面の回復や安定といった効果も得られている。今後は、生殖医療における統合医療の臨床的有用性と可能性をさらに探求し、より多くの患者支援に活用していくことを目指す。